

児童生徒理解とは

～観察し、見取ることの重要性～

教育における“見取り”とは、教師が子供一人一人の行動（表情、発言、つまづきなど）を日常継続的に観察し、その内面や学習状況を深く理解・解釈する指導の基本だと言われています。それは、たんなる観察（見る）ではなく、子供の背景にある思いや成長の瞬間をとらえ、読み取って、適切な声かけや支援につなげる指導技術だと言えます。

教師の専門性については、本稿No.5で述べたとおりですが、その中で児童生徒理解についても触れさせていただきました。今回は、そのことについて、もう少し掘り下げて述べたいと思います。

まずは、私の失敗談から記します。

私は中学校の教師でした。若かりし頃、意欲まんまんで学級経営にも懸命に取り組んでいた時期のことです。私の学級に、とてもまじめで学習態度もよく、リーダーとしてしっかりと活動する女子生徒がいました。私は当初から彼女を信頼して、いろいろな仕事を任せていました。彼女はあまり目立つ生徒ではありませんでしたが、黙々と活動している姿が印象的でした。

2年間の過ぎ、卒業を間近に控えた時、生徒たちに、「教室のカーテンをだれか洗ってきてくれないかな」と呼びかけました。すると彼女が手を挙げて、「私がやってきます」と言ってくれました。いつものように献身的な態度に私は「ありがとう」と言ってお願ひしました。数日して、きれいにアイロンがかかったカーテンを彼女が持ってきてくれました。

そして、卒業式も終わり、そのあとの保護者との懇親会の場で、私は彼女の母親から驚くべき言葉を

投げかけられたのです。

「先生、私の娘はカーテンを洗濯して、アイロンをかけながら泣いていたんです。どうしたのって聞くと、今まで先生は私のことを少しもほめてくれなかったけど、このカーテンを持っていけば最後にほめてくれるかな、と言って泣いていたんです」と。

予想外の言葉に私は愕然としました。私はいつも彼女の献身的な態度に感謝し、彼女を“認めて”きたつもりでした。でも、それが“つもり”だったことを思い知らされたのです。彼女にその都度声かけをしてこなかった、彼女の行動に感謝の言葉をかけてあげられなかったのだと思いました。それが現実でした。教師として失格です。

生徒理解などと今は偉そうなことを言っていますが、その時の私は、自分ではやっている“つもり”でしたが観察が甘く、“見取り”がしっかりとできていなかったために、一人の生徒の心を苦しめていたのです。大きなショックでした。

児童生徒を見取るということは、教師にとって重要な資質のひとつです。自分ではよく観察し、見ている“つもり”でも、実際には私のようにできていなかったり、見ても適切に声かけができなかったりということならば、教師として大いに反省しなければなりません。

すこし前に、『さばの缶詰、宇宙へ行く』という本を読みました。これは、小坂康之先生が行った実践を林公代さんがまとめた共著で、『福井県立小浜水産高校』（統合後は『福井県立若狭高校』）が14年かけて宇宙日本食『さば缶詰』を開発し認証され、宇宙で野口聡一さんが「うまい」と絶賛されたことで有名なお話です。

この中で、“見取り”について次のように書かれ

ています。「小坂が教師生活で最も大事にしているのが“見取り”だ。この生徒は何が好きなのか。何に興味関心があって、今、どういう問いをしているのか。生徒が一步、踏み込んだ瞬間を見逃さずに『いいねえ』とあいづちを打つ。それは言葉の時もあれば行動の時もある。どんな小さなことでも、生徒が何かに気づき感動して、踏み出したときにあいづちを打つ。認める。それが健全な学びや成長につながると考えている。」

そして、小坂さんは「認める」ということについて、具体的な体験を述べています。

「ちゃんと授業に向き合わない生徒には何もしないし、引っ張り上げることもない。でも、その生徒の学びが進んでいるかどうかは見ている。例えばある生徒がカッター（船）で風を読んで考えてこいでいる時がある。『どうやってこぐの?』と聞いて『いいね』と認める。すると翌日からその生徒は別人になる。そういう瞬間を絶対に見逃してはいけないんです。集中し過ぎて授業の後はへとへとになりますけどね（笑）。」

これを読むと、教師が焦ってなにか対応するのではなく、じっと観察し見取ってそのチャンスを待つ。そのチャンスとは、児童生徒が本当にかんばったときを見逃さず、そこですかさず声掛けをすることだと思います。それがその子にとっていかに大きな意味を持つか。そこからその子はみるみる変わっていく、成長してくという実体験だと思います。これが教師の仕事なのだと思います。だからへとへとになるというくらい、それは大変な仕事でもあるのです。

子供たちは皆、家庭環境も違えば、行動パターンも性格も違います。それぞれに個性があります。だから、教師がただ、ボーと見ているだけでは、子供

たちの本当の姿は見えません。かといって、1人の子供のすべてを理解することは不可能です。できることは、ただ一つ。子供の傍らにいて、その言動に耳を傾け、目を凝らしていることだけです。そして、子供の変化を見逃さず、本当にかんばったことに対しては、「いいねえ」と声掛けし、本当に苦しんでいることに対しては「どうしたんだ」と問いかけてやる、それしかできません。でもそれこそが教師の役割だと思っています。

私たちが思っている以上に、子供はよく見ています。かんばってもいないことに対して、先生から「よくかんばったね」と言われてもうれしくありません。本当は叱ってほしいのに何も言われたいのも嫌なのです。口では反抗しても実はうれしいと思っていることすらあります。難しいことですが、それを理解し、身に付けることこそが教師の最も大事な資質のひとつだと思います。

その結果、児童生徒が救われたとするならば、教師としてこれ以上の喜びはありません。

先生方が、子供たちをよく“見取り”、子供たちの成長を支援していただけたなら、学校で学ぶ子供たちはどれほど幸せなことでしょうか。そんな学校であると信じていますし、ますますそういう学校になってほしいと心から思っています。

（市川三郷町教育長 渡井 渡）

